

殺戮の凶王が竈を前に安らぐのは間違っているだろうか

くるりくる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

殺戮の凶王はダンジョンに腰を下ろした。

彼が通った後には草の根一本も残らない。

そんな彼が竈を前にして安らぐのは間違っているだろうか？

## 目次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 殺戮の凶王と竈の神                            | 1  |
| 彼を取り巻く色々な状況                          | 6  |
| 白兔と凶王                                | 12 |
| 凶王と剣姫                                | 21 |
| I F : 殺戮の凶王が剣姫と共に戦うのは間違っているだろうか？     | 27 |
| の2                                   | 33 |
| I F : 殺戮の凶王が影の国の女王に鍛えられるのは間違っているだろうか | 40 |

## 殺戮の凶王と竈の神

風切り音が豪と鳴り響き、その甲高い音は途切れる事なく続いていく。狭く薄暗い洞窟の中であるために音は反響し拡大して不快な音をあたり一体に撒き散らすも音が途切れる事はなかった。

薄暗い洞窟、だが壁に生えるように何本も何本も顔を出す光る結晶によつて完全な暗闇に包まれるという事はない。薄暗く、人が近寄りそうもない洞窟内だが石と砂の地面には大小の光る紫色の石が何個も何個も転がっていた。

硬い地面を踏みしめる音、それ以上に洞窟内に響き渡る甲高い音。そして、耳障りで、生理的嫌悪を催す音が、洞窟内に響く。風を切り裂く甲高い音は赤黒い槍が振るわれるたびに発生する音で、生物にとつて生理的嫌悪を催す音は槍によつて穿ち、潰された存在から湧き出た音。

赤黒い槍を持った、病的なまでに青白い肌の男がかつて生物であった残骸と紫色の石が撒き散らされた道を行く。壁に亀裂を起こし、その亀裂から湧き出て目の前の道行を邪魔する存在の悉くを男は打ち碎いた。

その行動に一切に慈悲はない。その瞳になんの感情も灯していない。ただ目の前に立ったから、己にとつて邪魔だったからという理由で男は邪魔する存在全てを殺し、その血を浴びて突き進む。黒衣を身に纏い、体にルーンの刺青を刻み込んだ男の名前はクーフリーン。

ケルト神話において光の御子と呼ばれ、光神ルーの息子であるクーフリーン。しかしその名前を冠する男には神の子としての神聖さは陰り、その行動には下界の子を慈しむ心の動きなど全く感じさせなかった。

何故ならば、彼は陰の側面が強く浮き出た存在なのだから。

今日も今日とてダンジョンに行く。

この迷宮都市オラリオについて3年程だが、俺にとつてダンジョン

に赴き金を稼ぐという行為は飽きるほど繰り返してきた行動だ。もはや惰性にまでなつてきた行動だが俺がそれを止める事はない。

俺は転生者だからだ。

徒に死んじまったとか、お詫びに転生だとか、チートをつけるからとかニヤニヤと笑いながらご機嫌を取った神とやらが俺をこの世界に転生させた。

冗談じゃない。俺は確かに人生半ばで死んじまったアンラツキーだったのかもしれない。それでも懸命に生きてきた。後悔を後に生まないように、必死こいて生きてきたつていうのに……死んじまつてそれが神様のミスだと？ ふざけるのも大概にしやがれと思ったよ。

だがあちらは俺の意見などどうでも良いのか何やら押し付けてそれではいさよならだ。そしてこの世界に生まれて、普通に生活して行く中で俺は過去の俺を思い出した。その日決めた。絶対にそいつを殺してやると。そもそも次また会えるのかさえ分からなかったが、それでも俺はあのふざけたクソ神を殺すと決めた。

このままじや上に怒られる？ 早くしてくれ？

てめーの事情なんざ知るかクソ野郎。女だろうが男だろうがそもそも性別が無かろうがどうでも良い。とにかくぶつ殺す。

そう決めた俺だが、この世界とは相性が良かったのか、神が実在するとのことだった。そんな時、俺は腹を抱えて人生一番で笑った。神が実在するなら何かしら知ってる奴がいるはずだと、俺はそう当たりをつけた。

迷宮都市オラリオ。

神とやらは大概そこに居るらしいとガキの頃に耳にした俺だが、無鉄砲に突撃することだけはし無かった。ガキの身分で一体何ができるって話だ。力も、金も、権力もねえみすぼらしいボロを着た村人が、況してや人間のガキが神とやらに一矢報いることも出来ないだろう。だから俺は力をつける事にした。智をつける事にした。情報を集める事にした。

畑仕事を終わらせたら自分の背丈よりでかい木の枝ぶん回して筋力をつけた。村の知恵者の話を熱心に、何度も聞いた。月に1程度の

間隔で訪れる行商人から聞き出せるだけの情報を聞き出した。

そして18になった頃、俺はオラリオに向かつて今に至るって訳だ。ダンジョンでうじゃうじゃ湧き出るモンスターを殺し、魔石を売って金にして武器を鍛え、魔法のことが記してある本を読み漁ると共に情報屋から情報を買う。そんな生活を続けて三年経ったがクソ神に関する情報は一切無い。

最近はいライラを通り越して惰性で生きるような感覚が続いている。

だが、取り繕うようにへらへらとした笑みを浮かべたクソ神のことは1日たりとて忘れた事はない。

いつの日か訪れる復讐に牙を研ぎ澄ませている、それが俺だ。

もはや過去の名前を忘れ、クーフリーンというあやかり名だけが俺を示す唯一となった。

そんな俺だがふとした拍子に纏わりついてくるガキに目がいくようになった。

そいつは俺にとってただただ利用するためだけの存在だった。代わりに俺は金をそいつに提供するだけの関係だと俺は思っていた。だがどうやらそれは俺の勘違いだったようでそいつは事あるごとに俺に構ってくる。

見た目ちんちくりんのガキンチョのくせして妙に偉ぶった言動をとりやがるから最初は無視してたんだが、そいつも馬鹿じゃないのかこれ以上無視するなら神の恩恵の更新をしないと来た。強さを求める俺にとってそれは死活問題だった。一週間、そして一ヶ月を超えた時に俺の方から折れた。そいつは俺が反応した事に飛び跳ねて喜んでいやがったが俺には何がそんなに嬉しいのか全く訳がわからなかった。

神は人間たちに恩恵を施し、施された人間は力をふるって金を稼ぎ、神の力を誇示し、それらを神に捧げる。そうだったギブアンドテイクの関係が人間と神の関係だ。余計な感情はいらない。俺はその時まで神を利用し、そして神は俺から搾取するだけ。

ある時俺は問いかけた。

『てめえ、一体何が望みだ。金か、名誉か、それとも力か』

するとそいつは悲しそうに笑って、俺の体に抱きついて言った。

『僕は君と家族になりたいんだよクーフリーン』

ヘステイアにとって初めての家族、その子の名前はクーフリーン。親御さんは英雄譚が好きなのか、それとも別の要因があったのか分からないけどあの子にクーフリーンと名付けたのは彼の親だ。

クーフリーン。

ケルト神話における大英雄。

その名前に負けず、彼の力はまさしく英雄級と呼ぶに相応しいものだと思ふ。一人で無茶無謀の冒険に出て行って、それでも絶対に帰って来てくれる存在。だけど彼はとても、とても悲しい子だと僕は思わずにはいられない。

力と智を貪欲に求め、来るべき殺したい相手の為だけに力を高める為だけに生きているという悲しい存在。一体どんな事をされたんだろうと僕は悩まずにはいられない。無愛想で、冷酷で、敵対者は全員息絶えるまで殺しつくすと巷で噂される彼だけど僕だけは知ってる。

ある日、彼の帰りが遅くてダンジョンの入り口であるバベルの塔の前で待つていた時、朝昼晩と食事抜きで突っ立ってたのが祟ったのか軽くめまいを起こして倒れそうになった時、いつの間にか側にいた彼は僕を支えてくれた。

そして初めて会って、拠点である教会の地下室で、僕は初めての眷属で嬉しくっていつも寝ていたベッドを彼に貸して僕自身はソファで寝ようとしたけど、彼は僕の首根っこを掴むと言う荒々しいやり方だったけど僕をベッドに移動させてくれた。

他にも僕が好きな食事をいつもくれる。僕のがままをブツクサ言いながらも聞いてくれる。彼は残酷で、冷淡で、敵対者には一切の慈悲を向けない殺戮者なのかもしれない。でも、それだけが彼を表す全てじゃない。

『お金なんて稼げなくてもいい。有名にならなくてもいい。ただ、怪

我せず絶対に帰って来てくれよ。ましてや死ぬなんて以ての外だからね』

僕が彼に願った最初の言葉。

彼は覚えてねえと言うけど、いつもいつも絶対に僕の所に戻って来てくれる。

神友であるヘファイストスやタケミカズチは口を揃えて彼と縁を切れと言うけど僕は絶対に彼を裏切らない。

だって彼は間違いなく英雄で、そして僕の大事な大事な家族なんだ。



## 彼を取り巻く色々な状況

オラリオ、数多くの種族が集う場所。中心には天に向かってそびえ立つバベルの塔。円状に石の塀で囲まれ、塔の存在する街の中心に向かってメインストリートは8本伸びている。ダンジョンに赴くには入り口の都合上、どうしてもバベルの塔に向かわなければならぬ。

クーフリーンは道ゆく人々からの視線とひそひそ話にうんざりしながらも慣れた道行を歩いてきた。その手に赤黒く鋭く禍々しい棘が生えている槍を右に、左にはパンパンに魔石が詰まった皮袋を手に持って帰還の道行に身を費やしていたクーフリーンは向かいから多数の種族を伴った集団が歩いて来るのが視界に映る。

その集団の顔ぶれの中には知っている顔が何人かいたが、別に知り合いという訳でもなかった。

数々の種族、数々の武装を携えた集団はこのオラリオにおいて著名な人物たちばかり。ダンジョンに赴いてモンスターを倒し、魔石を収集して日々の糧を稼ぐ冒険者や商売人が集団を指差し、ロキ・ファミリアと噂する。

ロキ・ファミリアはオラリオにおいて二大派閥と呼ばれる内の片割れ。強力な力を備えた冒険者を何人も抱え、最前線を戦う者には及ばないまでもそんな彼らを支える多くの者たち、そして何十人の下級冒険者を抱える大派閥のファミリア。

クーフリーンが所属するヘスティア・ファミリアは彼しか存在しない零細ファミリアであり、ロキ・ファミリアのような大手と比べる事がおこがましい。

クーフリーンは近づく集団のことなど考慮せず、そして瑣末な問題と判断して前へと進む。メインストリートに緊張が走った中、ついにロキ・ファミリアの集団とクーフリーンがかち合った。

先じて声をかけたのはロキファミリアの集団の中で背が低く子供と言っても差し支えないような金髪の男だった。上等な戦闘衣を身に纏い、腕には小手をはめ両手に槍を持ったその金髪の少年はにこやかな笑顔を浮かべている。

「やあ、クーフリーン。もう帰るのかい？」

「それがどうした。てめえに関係があるのか」

「そう言われたら参ってしまいうね。君は別のファミリアだし、僕たちにダンジョンでの成果を報告する必要はないさ」

「それが分かつてるなら一々話しかけて来るんじゃないやねえ。邪魔だ小僧」

クーフリーンの素っ気なさはいまに始まったものではない。そのため彼に話しかけた金髪の小人族、フィン・ディムナは変わらない微笑みを浮かべたまま特に反応を示さなかったが、彼はロキ・ファミリアの団長である。そんな団長が適当にあしらわれれば怒りや不快感を抱く団員が出るのは道理であった。

「テメエ……クーフリーン！ 団長になんて口聞いてんだ、アア!?」

「女、雑魚がいくら吠えたところで何も変わらんぞ」

「あんだとっ……!!」

露出過多といっても良い褐色の少女が目を見開き、激しい剣幕でクーフリーンに恫喝するも彼の恐怖を引き出す事は一切ない。レベル5の第一級冒険者であるアマゾネスの少女、ティオネ・ヒリュテの本気の恫喝は周りの住人や冒険者を凄ませる覇気に満ちていると言うのに。

「それとも何だ。俺の邪魔しようってのか？」

そう言ったクーフリーンは視線をティオネに向けて固定する。彼女に戦闘の意志があると判断すればクーフリーンは右手に持つ槍でその柔らかな肉体を貫くだろう。その瞳はティオネという存在を確かに認識しておらず、明確な敵対者としてさえも認識していない。ただ口煩い女程度にしか思っていなかった。

それが分かるからこそ、ティオネの頭に血が上ってしまう。彼女は数多の修羅場をかくぐつて、誰とも知れない屍を乗り越えて、そして姉とも思えた存在を殺してまでいまある場所にたどり着いている。そうだと言うのに無価値なものを見る目で見られるなど、彼女には耐え難かった。

ブチ殺す、ティオネは腰元のククリナイフの柄に手をかけて——そ

れを叱責する声に我を取り戻す。

「やめるんだテイオネ！ 悔しいが君ではクーフリーンに勝てないよ」

「っ……はい……」

無意識に一步前に出ていたテイオネの行動をたしなめるように、手に持つ槍で彼女の行動を制したフィンであったが不満を持つものは多くいた。特にテイオネと肩を並べて戦って来た幹部陣にとっては戦友に唾を吐かれたに等しいのである。フィンはなぜ平気なのかと、不満を持つて彼に厳しい視線を向ける者もいたが、彼も厳しい表情を浮かべている事を察して、彼も自分たちと同じであると感じた仲間達はその敵意をクーフリーンのみに注いだ。

「俺を殺したいならそうすればいい。もつとも……その時は俺もお前たちを殺すがな」

「そうだろうね『凶王』<sup>ジェノサイダー</sup>クーフリーン。君は敵対者に容赦しない。その事を、このオラリオに住む冒険者は良く知ってるよ」

「なら俺の前から失せろ。てめえらを全員殺したところで俺には何の足しにもならん」

クーフリーンは左手に持った皮袋を肩に担ぎ直し、ロキ・ファミリアの横を通り過ぎる。立ち止まっているロキ・ファミリア20名以上から敵視されるクーフリーンであったが突如立ち止まり、舌打ちをした。

「あー、クーフリーン〜ン！」

声を張り上げ駆け寄ってくる少女。メインストリートの人の群れをかき分けて走り寄ってくるその少女の姿を見てクーフリーンは思わず舌打ちをしてしまったのだ。

そんな事も知らずに少女は笑みを浮かべて彼の元まで走り寄ってくる。肩がむき出しですその短い白いワンピースを着た黒髪青目の幼い少女はクーフリーンの前で立ち止まるとその体にギュツと抱きついた。

だがそれは、他の者からしたら自殺行為にしか見えなかった。

「もう！ 君はほつといたらいつつもどつか勝手に行っちゃうんだか

ら！ 少しくらい僕のことを考えてくれたってバチは当たらないぜ  
！」

「うるせえ。俺がどこに行こうが勝手だろうが。魔石は取ってきた。  
これで金は十分だ」

「そう言う事じゃないって何度も言ってるだろ〜！ 僕は神様なんだ  
よ？ 確かに神の力は封じられているとはいえもうちよつと敬って  
くれてもいいはずだよ〜」

「……行くぞへステイア」

クーフリーンは己の主神であるへステイアにそう言つて今度こそ  
ロキ・ファミリアの横を通り過ぎた。へステイアも彼の後について行  
くも疑問を浮かべながら後ろを振り返る。その先にはロキ・ファミリ  
アのメンバーがおり、鳩が豆鉄砲を食ったように目をまん丸にして  
クーフリーンとへステイアを見ていた。

「君の知り合いかい？」

「俺に知り合いがいると思うか？ ただの有象無象だ」

「む！ いくら何でもそう言う言い方はダメだよクーフリーン。君た  
だでさえ無愛想なんだから少しは愛想良くしないと〜」

「それが何か役に立つのか？ 役にも立たんならその辺の物乞いにて  
も食わせておけ」

「だからそう言った言い方はダメだって！」

メインストリートに行く二人であったが突然クーフリーンが立ち  
止まり、石レンガの建物と建物の間にうっとおしそうに視線を向け、  
右手に持った槍の穂先を轟音と共に突き出した。

しかしその槍の刺突は何か硬い物に防がれる。硬質なもの同士が  
ぶつかった甲高い音がストリートに響く中、クーフリーンは油断なく  
建築物の間に向けている。敵意ではなく、うっとおしいものを見る彼  
であったが、衝撃が発生した瞬間へステイアが吹き飛ばないようにそ  
の体を左腕で抱き込んでいた。

へステイアはクーフリーンの腕に抱き込まれ、何が起きたのか動転  
していたが彼が自分を守るためにこうしたのだらうと思ひ、その胸の  
奥にほっこりとした気持ちを抱いた。

「わわっ!? 一体どうしたのさ!」

「あらヘスティア。こんな所で会うなんて奇遇ね」

「げっ!? この声は……」

甘ったるく、蠱惑的な声。声を聞いただけでその女神の魅了が漂ってくる。子供も神も骨抜きにして魅了する存在をヘスティアは知っていた。美の女神と呼ばれる生まれながら完璧な美しさを備えた存在である。

そしてこの声の持ち主はヘスティアが一等に苦手で、敵視している女神のものであった。

「フレイヤ!」

「御機嫌ようヘスティア。それに……クーフリーン。今日もいい天気ね」

「君、こんな所で何してるのさ」

「ヘスティア、言わなくても分かるでしょう? 彼を迎えに来たのよ」

美の女神フレイヤはそう言ってクーフリーンに目を向ける。彼女のそばには鋼のような肉体の大男が控えているが、彼女は既に従者を映しておらず、その目には尽きても消えぬような炎の情欲を宿し、恍惚の表情を浮かべてゆつくりとした動きで歩み寄ってくるがクーフリーンにはうつとしい程度のものにしか見えなかった。

美の女神であるフレイヤがただ動くだけで道行く人々は魅了され彼女に惹きつけられる。彼女が甘く囁けば、それだけで老若男女問わず彼女の奴隷となる。そんな彼女が恍惚の表情でクーフリーンを求めているにも関わらず、クーフリーンには何の影響も与えていない。

「失せろ、女」

「つれないわね。私は貴方をこんなにも求めているのに……私に求められるなんて他の男が知ったら羨ましがるのよ?」

「知らん。男が欲しければそこらの男でも買って腰でも振ってる。俺の邪魔さえしなければめえの事などどうでもいい」

「そんなこと言わないで。私は貴方が欲しいの。貴方の身も心も……そして魂さえも」

フレイヤの吐息は甘ったるくその身を犯すようで、神であるヘステイアもその身を思わず震えさせてしまった。神ではない純粹なヒューマンであることを知っているヘステイアは恐る恐るクーフリーンの顔を見上げた。

もしかしたら、彼が自分の元から去ってしまうかもしれないと言う恐怖を感じてしまったが故に。

「何度も言わせるな女。失せろ」

だがクーフリーンはヘステイアの不安をかき消すかのように彼女の体を一瞬だけ強く抱き寄せて、彼女を伴ってフレイヤと鋼の従者に背を向けて去って行った。

フレイヤと鋼の従者『おうじゃ猛者』オツタルは去りゆくクーフリーンとヘステイアの後ろ姿を見送った。だがフレイヤはこらえきれないと言うかのようにその体を己の体で抱きしめて、熱のこもった息を何度も何度も吐き出した。

「ああ！ クーフリーン！ なんて純粹な色の魂なのかしら！ たった一人で二大派閥に匹敵すると言われるその力……貪欲なまでに求める智。ただ一つの己の目的の為に狂ってしまったその純粹さ！  
ああ……彼が欲しい！ 他の何よりも！」

その情熱的な求愛が、去り行くクーフリーンに届くことはない。

## 白兔と凶王

「クーフリーン！ 僕たちの新しい家族だよ！ さあベルくん、自己紹介して！」

「べっ、ベル・クラネルです！ よろしくお願ひしますっ……！」

ヘスティアを伴ったクーフリーン、彼が朽ち果てた教会の地下室への扉を開けると見慣れぬ少年の姿を見た。ビクビクと身を震わせながら右往左往と首を回している姿は、泥棒にしてはあまりに無警戒で、そして滑稽でクーフリーンは一瞬どうしようか迷ったがヘスティアがその脇を通り抜けて少年とクーフリーンの間に入り、少年に向かって自己紹介するように促した。

少年はヘスティアの姿を見ると明らかにホツとしたように胸をなで下ろすも、クーフリーンの姿を見て過剰なほどに身を震わせる。おっかなびつくりの姿は肉食獣を前にした小動物を連想させるがクーフリーンは別に彼を食おうと思っていない。そもそも何の価値も抱いていなかった。

「クーフリーン。好きに呼べ」

「は、はい！ クーフリーンさん！」

上ずった声でベルが返事をするも、クーフリーンは興味が無かったのか彼が座っていたソファアの横を通り過ぎて部屋の奥に存在する卓の上に乗った魔石の中に秘められた魔力を燃料にして光を放つ魔石灯に近づき、手に持っていた皮袋の中から手頃な大きさの魔石を取り出すとそれと、既にはめられて輝きを失っていた魔石を交換した。「こちらクーフリーン！ ベルくんは新しい家族になるんだからもうちよつと愛想良くしなきゃダメだよ。君だつて気まずい空気は感じたくないだろうっ？」

「どうでも良い。そのガキが死のうが生きようが俺には関係がない」

「おいおいそんな言い方はないだろう！ ベルくんはここに来てまだ日が浅いんだから少しは親身になってあげるとか——僕の話はまだ終わってないぞう！ どこに行くんだい？」

「上に居る。何か用があったら言えへスティア」

クーフリーンはそう言つてベルに一瞥することなく来た道に戻り始めた。ベルはポカんと、口を開けて間抜けな顔を晒しているが一瞥すらくれないクーフリーンが氣づくことはあり得ない。地下室から朽ち果てた教会への唯一の道である階段を昇る姿をへスティアとベル。

バタンと、ドアが閉められた。

「……ベルくん、こんな事を言うのはあれだけど、その……彼のことを嫌いにならないであげて欲しいんだ。彼は……実は凄く悲しい子なんだよ」

「えつと……何か、事情があるんですか？」

「ベルくん、君は、人の子は神に嘘をつけないって事知ってるかい？」  
「そ、そうなんですか？」

ベルの素つ頓狂な声。ベルの純粹さが垣間見えるものでありへスティアは微笑ましくなつて笑顔お浮かべるも、すぐに脳裏に浮かぶのは『凶王』と呼ばれ誰からも恐れ避けられる黒衣のクーフリーンの後ろ姿。

へスティアは知っている。

クーフリーンは自身が授かった神の恩恵だけではなく、一步間違えば死ぬような死地を何度も掻い潜つて、地獄のような修練を何年も耐え忍んで、その果てに善悪を超越した強大な力を入れた事を。それは酷く悲しい物語。

「彼は……僕に嘘をついていると分かっているけども嘘をつき続ける。何度も何度も、僕が彼と出会った今までの三年間ずっと。こう言っちゃなんだけど彼は他の子に無頓着だ。でも、何でか嘘をつき続けている。きつと誰にも話したくない事情があるから……ああなつてしまったんだ。だから……仲良くは無理かもしれないけど……せめて嫌いにならないであげてくれ」

「神さま……はい、わかりました！」

そう言つて笑うベルの心優しさと純粹さにへスティアは感謝するも、その心優しさを利用するような真似をする自分に自己嫌悪を覚え



たのはここだけの話だ。ヘスティアはその自己嫌悪を決して忘れないように、胸の内に留まらせておき、それでもなお彼らの抛り所で存れるために、帰るべき場所で在るために笑顔を浮かべた。

「さあ、っ」飯にしよう！ 今日バイト先でもらったジャガ丸くん祭りだぞう！」

「クーフーリンン！ このままじゃベルくんが何処かに行っちゃようよっ！」

「改宗か。好きにさせろ」

「ってそんな大げさな話じゃないけど!? それに改宗するには一年以上の期間をおかないとダメなのは君も知ってるだろう！」

ベル・クラネルが迷宮都市オラリオに来て七日ほど経ったある日、ヘスティア・ファミリアが拠点とする朽ち果てた教会の地下室に珍しく身を置いて槍の手入れを行っていたクーフーリンの元にヘスティアが涙を浮かべて抱きついて来た。クーフーリンの元まで一直線に地下室へのドアを開け放ち勢いよく駆け寄って来たヘスティア。

クーフーリンはヘスティアの方を全く向かないが槍を壁に立てかけてヘスティアが傷つかないようにした。だが涙目のヘスティアはそんなことには気付かず、一も二もなくクーフーリンの胴体に抱きつく顔面をグリグリと押し付ける。なすがままとなっていたクーフーリンだが流石にうっとおしく思ったのか、ヘスティアの首根っこを掴んでベッドの上に放り投げた。

「あのガキがどうかしたのか」

「ベルくんが……女の子のところに行っちゃおうう！」

「それがどうした。好きにさせろ。結果としてあのガキが死のうが生きようが俺には関係ねえ」

「そんなこと言わないで、僕の話聞いておくれよ」

ベッドに放り投げられてもなおクーフーリンに構ってくるヘスティア。これではどちらが子で、敬うべき親なのかわからないと言うもの。泣きつくヘスティアだがクーフーリンはうっとおしそうにするだけで、それ以上は特に何もしない。

『ジェノサイダー』

『凶王』とオラリオ中から恐れられるクーフリーンだが、ヘステイア相手にはこういった一面が見て取れる。ヘステイアはそれを知っているからこそ、クーフリーンは『凶王』ジェノサイダーではないと彼女は確信を持って神友であるヘファイストスやタケミカツチに自信を持っているのだ。とは言っても二柱の反応は芳しくない。

「ベルくんみたいに素直でいい子、きっと向こう1000年経っても見つかからないよ！ それにベルくんはヘステイア・ファミリアの家族なんだから！ そんなベルくんがどこぞの馬の骨とも分らない女の子に誑かされるなんて我慢できないよ〜」

「めんどくせえな。だったら首輪でも付けておけ」

そう言ってクーフリーンは立ちあがると壁に立てかけていた槍を掴み、ヘステイアに背を向けた。ぶー垂れていたヘステイアはキョトンとした顔で彼の背中を見つめ、慌ててベッドの上から降りて外へと向かうクーフリーンを追いかける。

「どこに行くのさ！ 僕の愚痴はまだ終わってないぞう！」

「あのガキを引っ張ってくる。それだけだ」

「雑魚じゃアイズ・ヴァレンシユタインには釣りあわねえ！」

酒場であり食事を提供する店である『豊穰の女主人』

店内に響くその声に全くその通りだと、ベルは思った。

自分自身への落胆と悔しさのあまり涙を流し、それでも強くなりた  
いと思いついて席から立ち上がり、駆け出した。

強くなりたい。

なら戦うしかない。自分自身を鍛え、強くなるしかない。

心も体も強くなつて、憧れの人に近づくために！

「ベルさん!」

彼の名前を呼ぶ声がする。だが彼の意識はすでにダンジョンに向かつており、彼を呼ぶ声や彼に集まった視線に構う余裕など存在していない。木の押し開くドアを体ごとぶつけて開け放つて外に駆け出

したベルだが、何かに当たって跳ね返され、店内に戻されてしまった。普段は礼儀正しく、下手に出るベルだが今だけは、目の前に立つ人物を睨みつけ——られなかった。

「ガキ、何処に行く気だ」

豊穡の女主人は夜ということもあり多くの客で賑わっていた。客の全員が冒険者で今日の成果に一喜一憂して酒を喰らい、酔って気分を良くしていたと言うのにその平坦で冷酷な声によって、強制的に酔いを覚まされた。

その声の主を、オラリオに住む冒険者が知らない訳が無い。

黒衣に身を包み、凶悪な棘だらけの赤黒い槍を手に持っている冷酷な殺戮者。噂では迷宮都市オラリオ最強の冒険者であるオツタルと同等の力を持つと言われる最強の一角。

『凶王』クーフーリン、彼が豊穡の女主人に姿を現した。

先ほどの喧騒が嘘のようにしんと静まった店だがクーフーリンには関係ない。クーフーリンはベルの首を左手で掴み、その小さな体を店の外に放り投げた。ベルに対して全く気遣いのないその動きは、彼の小さな体を少しばかりの時間宙に浮かせて、呆気なく石で舗装された路面に叩きつけられた。

「アンタ、ウチで食い逃げは許さないよ」

「……」

木造造りのカウンターの向かいでクーフーリンを睨む恰幅の良い女主人。この店の主人であるミア・グラントの言葉にクーフーリンは面倒臭そうに顔をしかめ、小さな皮袋に入った手持ちの金をミアに無造作に放り投げて受け渡す。これで文句は無いだろうとクーフーリンはこの店に背を向けて去ろうとするがミアから声が掛けられた。

「で、アンタは何しにきたわけ？ 荒事なら御免だよ」

「てめえに関係はねえ。あのガキを連れ帰りにきただけだ」

「！ じゃああの子、本当にヘスティア・ファミリアに……」

ミアの言葉が、そこに込められた意味が店内に広まってゆく。クーフーリンが所属するヘスティア・ファミリアに入団した存在。それだけでこの場にいる彼らの好奇心を刺激するには十分なものであった

が、クーフリーンに関わるべきでは無いと言う警鐘が彼らにこれ以上踏み込ませるのを躊躇させた。

だが、強き者たちは例外だ。

店の一角で遠征での疲れを癒す宴会と洒落込んでいたロキ・ファミリアの遠征組。思わず立ち上がってクーフリーンに詰め寄ろうとする者が現れる。

「アイズ!」

「アイズさん! 危ないですよ!」

人形のように美しく無表情の金髪の少女。ロキ・ファミリアの中から彼女を制止する声上がるもアイズ・ヴァレンシュタインは止まらない。今度こそ店の外に出ようとするクーフリーンの数歩前まで近づき立ち止まった。

「あの……すいません」

「あ?」

「さっきの子、が……店を飛び出た理由……私が原因だから——」

「女、てめえの事などどうでもいい」

バツサリとアイズの言葉を切り捨てたクーフリーン。彼にとって理由があるうがなんだろうがどうでも良かった。そんな事は関係がない。

アイズがぐくりと息を呑んで、恐る恐る顔を上げた彼女の視界に映ったのは、アイズのことを何とも意識していない空虚な瞳。それがアイズの心を強く締め付ける。そんな目で見られたくないとアイズは思った。

「ベルくん!? 大丈夫かい!」

「ゴホッ……ケホッ! あ……かみ、さま……?」

舗装された石レンガの地面に叩きつけられたベル。その衝撃で肺の中にあつた空気は全て吐き出され、背中を丸め、咳き込みながら必死になって呼吸をするベルのそばに駆け寄って介抱するのは彼の主神であるヘステイア。ここまでクーフリーンについて来ていた彼女であつたがまさかクーフリーンが同じファミリアの人間に手をあげ

るとは思っても見なかったのである。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「は、はい……大丈夫、です」

「そうか良かったよ！ って何処に行く気だいベルくん！」

「僕、強くならなきや……このままじゃいけないんです……」

うわ言のように呟くベルはヘスティアのと介抱を制止を振り切ろうと体を動かし、立ちがるも、再び彼の体は地面に引き倒された。地面を引こずり、服が汚れ、砂が舞い、ベルの小さく細い体が傷ついた。

「クーフリーン!? ちょっと！ ベルくんに一体何するんだ！」

「ガキ、てめえはそのまま大人しくしてればいい。上層でちまちま身の丈に合った狩りでもしてろ」

ヘスティアの言葉を無視してそう言ったクーフリーンは、再び立ち上がるとうするベルの背中を踏みつけた。獣のように鋭い棘の付いた黒の甲冑に踏まれたベルの体はたやすく地面と接触する。ベルがどんなに腕に力を入れて立ちあがろうとしても、微塵もクーフリーンの足は動かない。

「それか牧場にでも行くか畑仕事でもしてろ。てめえの価値は、ただヘスティアの元に生きて帰って、ヘスティアを満たすだけしか価値がねえと理解しろ」

ヘスティア・ファミリアがクーフリーンの力によつて有名になるに従つて、これまで多くの存在が入団しようと、その富を掠め取ろうとして来たがその全てを痛めつけ追い払って来た。何故なら、己の私欲だけで動く存在ではヘスティアを満たせないと分かっていたからだ。ヘスティアが満たされればクーフリーンが求められることは無くなる。そうなったらクーフリーンはただただ己の強さだけを求めれば良い。その果てに、己の生と死を弄んだクソツタレの神を殺す。

ある意味ではベルはクーフリーンのお眼鏡にかなっているが、これではただの飼い殺しのペット。

クーフリーンは踏みつけるのをやめて、ベルの腹部を軽く蹴り飛ばした。だがクーフリーンの筋力は想像を絶する域に到達しつつある。手加減されているとはいえ、ベルの軽く小さな体は勢いよく、人通り

の少なくなったメインストリートを一直線に吹き飛んだ。

「クーフリーン！ もうやめてくれよ！ 僕は君が乱暴をする所なんて見たくないんだ！ これじゃ本当に君は『凶王』ジェノサイダーになっちゃやうよ！」

ヘステイアがクーフリーンの前に両手を広げて彼を止めようとする。このままでは君は誰にも理解されず、誰からも恐れられて避けられる存在になってしまうと。

「それがどうした。俺が何と言われようがどうだつていいことだ」

しかし、クーフリーンはただ力を求める存在。己がどのようなところに行き着こうが、その果てに目的を、クソツタレな神を殺せればいいと。

「そ、そんな……君はそれだけじゃないはずだよ！ 優しい所があるのを僕は知ってる！ すつごく、すつごく分かりにくいけど君は僕に優しくしてくれるじゃないか！」

「ヘステイア、それはてめえの勘違いだ。都合よく捉えてるだけだ。俺にとつちや、神の恩恵を与えるってんなら俺を玩具と思おうがそれで一向に構わねえ。神にとつちや人間なんざ……ただの玩具でしかねえんだからな」

愕然とするヘステイアから視線を外し、クーフリーンはベルを連れ帰ろうと吹き飛んで行った方に視線を向けて不快感に眉を僅かに寄せた。

確かに手加減した。その神の恩恵を授かったばかりの貧弱なベルの体が砕けないように手を抜いたが自力で立ち上がれるほど加減したわけではない。

「ゲホゲホッ！ ああ……ゴホッ！」

「ベルくん!? 大丈夫かい!？」

「あ……はい……ゴホッ……！ 神さま……すごく、痛いですが、けど……」

ベルに駆け寄ってその小さな体でふらふらと足元のおぼつかないベルの体を支えるヘステイア。彼女に肩をかされたベルは不甲斐ないとはかりに落ち込むもそれは一瞬だけ、己の主神を心配させないよ

うに笑顔を浮かべるも苦痛によって咳き込んでしまった。

「クーフリーンさん……僕は……強く、なりたいんです」

「ああ？」

「僕は……強く、なりたいんですっ……！」

「寝言は寝て言えガキ。ただ空を見て、手を伸ばそうと足掻こうとしなかったガキが今更何が出来る」

クーフリーンの言葉はベルの的を射ていた。ただただダンジョンに、オラリオに勝手に夢を見て、願いが叶うと浮ついてふらついていただけのちっぽけな存在。クーフリーンを最初に見たとき、きつと才能が溢れる人なんだと勝手に思っただけで、そして自分から届かないと諦めたベル。

「ただ今日、気づいた事があった。」

その行動は、正気の沙汰ではない。

勇敢でも蛮勇でもなく、ただ無謀なだけ。

ベルは自分の武器であるナイフを持って、フラフラの体でオラリオ最強の一角と噂されるクーフリーンに向き直ったのだ。

「僕は……僕は……っ！ 強くなるんだ！」

「………心意気だけは買ってやる、ガキ。だが、俺の前に立つ意味を教えてやる」

ベルは駆け出した。強くなるために。

憧れであるアイズ・ヴァレンシュタインに、クーフリーンに少しでも近づき、その隣にたちたいがために。

クーフリーンは駆け出した。強くなるために。

目の前に立つ一切合切を屍にして、果てなき屍の山の先にいると信ずる殺すべき相手を殺すために。

## 凶王と剣姫

ベル・クラネルというレベル1の少年の名前は、その日を境に瞬く間に広がった。

『凶王』ジエノサイダー クーフーリンが所属する零細ファミリアに入団したとされるヒューマンの少年。無謀にもクーフーリンに剣を向け、そして生き残った唯一の存在。クーフーリンは敵対者には一切の容赦も慈悲も向けない存在とされ、相手が二大巨頭のロキ・ファミリアだろうがフレイヤ・ファミリアだろうが食らいつくると噂されている殺戮の凶王が、何故かその少年を痛めつけるだけで見逃された。

そして本当かどうか定かでは無いが、早朝、オラリオの街のどこかでベル・クラネルをクーフーリンが手ずから鍛えているとの事。

その噂を確かめに、アイズ・ヴァレンシュタインは朝焼けの街を行く。己の中で沸き立つ衝動に従って、代わりの剣を片手に。

「……居た」

朽ち果てた教会の前、そこでナイフを構え腰を落とす白髪の少年にアイズは見覚えがあった。遠征の帰り、17階層でミノタウロスの集団に対処していたが一方的な戦闘に恐れをなしたのか、ミノタウロスたちは上層へと上がっていった。上層の冒険者に被害を出さない為に、アイズを筆頭とした第一級冒険者が前に出て、そしてアイズが最後の一頭を倒した時に、白髪の少年ベルを助けた時にアイズとベルは出会った。

出会いとしては良いものではなかっただろう、と彼女なりに思う。

石レンガの建物に脇に体を隠して、ベルの姿をじつと見てから視線を移す。そこには上半身の黒衣を脱ぎ、堂々と上半身の半裸を晒したクーフーリンが居た。

冒険者は背中に刻まれた己のステイタスを見られるのを嫌う。それは同じファミリアの人間であつてもだ。自分の情報、強さが漏れ出るのを恐れる為だ。その辺りに無頓着なアイズと言えど己の強さを



気心の知れない他人に知られたらと思うと僅かに表情が渋い顔になつてしまう。

それでも他人のステイタスを知りたいと思うのは人のサガか。

それもオラリオ最強の冒険者であるオツタルに匹敵するほどと影で噂されるクーフリーンのステイタスなら、好奇心を抑えるというのが無理というもの。

「いきますー」

心の誘惑・葛藤を振り払うかのように恐れと緊張、幼くも決意のこもった声がアイズの意識を切り替えさせた。

ベルは右手に逆手で持ったナイフ片手にクーフリーンへと突貫する。レベル1、冒険者になりたてで技術も疎かな身で自分から声を出して攻撃を仕掛けるなど愚かだと、アイズはなんども死地をくぐり抜けた冷静な冒険者として判断する。

石畳で舗装された地面を踏みしめ、クーフリーンへと駆け抜けたベルは右手に握ったナイフを足元から腹部へと抉り込むような鋭さで斬りかかった。側から観察していたアイズの目には、クーフリーンの足元に到達したベルが地面と顔が擦れるのではと思うほど沈み込みナイフで斬りかかったのを見て、その瞬間だけ駆け出しのレベル1とは到底思えない鋭さに驚いてしまう。

しかしそれではクーフリーンに決して届かない。

気怠げに左手の人差し指と中指の間でナイフの刃を挟み込み、たつたそれだけの動きでベルの渾身の一撃を防いだ。

「やあつー」

武器に不慣れな者は、武器に固執する。武器という己の最強の攻撃手段を手放すことを恐るからだ。アイズも駆け出しで、武器の扱いに不慣れな時は武器の存在に固執した。

だが、ベルはナイフの柄から容易く手を放し、体を捻ると共に右足をさらに踏み込ませ、拳を固めた左のパンチをナイフの柄頭に向けて放った。

止められて微動だにしないベルのナイフだが、その柄頭に力が加わればどうなるか。地面に向かって釘を金槌で打った時、釘が地面にめ

り込むように、ベルの拳はナイフという釘を動かした。ガリツと耳障りな音が離れた場所にいるアイズにも聞こえる。

ベルの動きはそこで終わらず、指と指による拘束が緩んだと思われるナイフを取り戻した事によって、確かな喜びを感じながらクーフーリンから距離を取った。

自分の攻撃が通じている事に喜びを感じているのだろうとアイズは容易く想像できた。あの『凶王』ジェノサイダーと名高いクーフーリンに攻撃を通した。それは彼の皮膚をほんの少し傷つけるだけのものなのかも知れないが、それでも確かに傷を負わせたのは事実。

アイズはその視線をベルに向けた。

次は、一体どんな攻撃を仕掛けるのか、気になって仕方なかった。

次にクーフーリンへと視線を向ける。

クーフーリンがこの程度の実力なはずがないと、そんな信頼を彼に向ける。

「おい」

アイズは一瞬自分に声が掛けられたのではとドキリとする。自分の監視は完璧であると密かに思っていたアイズの心にショックが走るもそれは彼女の勘違い。クーフーリンはアイズの隠れて窺っている建物に一瞥もくれず、ベルへと視線を向けていた。

「これで終わりか。さっさと次に繋げる。俺はまだ立っている」

「は、はいー」

ベルは表情を引き締め、ナイフを順手に持ち替えその間合いを詰めるように走り出そうとして、その体を硬直させた。

「どうした。まさかこれくらいで根を上げるか」

クーフーリンの問いにベルは答える余裕が無かった。それはアイズも同じだ。クーフーリンには一切の隙が見当たらないのだ。二人から距離があり、全体を見れて観察できる状況のアイズであっても、第一級冒険者の最強格であるアイズであっても今のクーフーリンから隙を見つけないことができなかった。

「武器も鎧も持たない相手に尻込みするなどそれでも戦士の端くれか」

「で、でも……どこに打ち込めば——」

「まさかダンジョンのモンスターが行儀よく腹を見せるとでも思っているのか？ ガキ、てめえが経験したようにダンジョンは理不尽そのもの。自分の身の丈に合わない障害などザラにあると覚えておけ。頭を捻れ。知恵を絞り出せ。思考と体を止めるな。でなければ死ぬぞ」

「っ！ はいー！」

「喋る余裕があるなら体を動かせ」

ベルは先ほど以上に真剣な顔つきでクーフリーンからの忠告を受け入れた。そして必死に頭を捻り、何通りもの考えを浮かべて、最善を選択しようとしていたが——その際に生まれた隙をクーフリーンが見逃すはずがない。

地を蹴り、ベルとの間にあつた数メートルの距離を潰すと無防備なベルの腹部に一撃をくれた。くの字に折れたベルの体。衝撃によって宙に浮き、痛みを吐き出すように咳き込んだベル。カランと、ベルの手にあつたナイフが地面に落ちたことで鳴った音を耳にしたクーフリーンはここまでだと、ベルに背を向けた。

「ガキ。今日は終わりだ」

「ッ！ ゲホッ……ガハッ！ 僕は、まだっ！」

「痛みで武器を手放した。そこでてめえは死んだも同然だ」

「……はい。明日も、またよろしくお願いします……」

ベルはそう言って手放したナイフを拾うと、落ち込んだ様子で背中を向けた。腹部を抑えながら拠点である廃教会に戻っていくのをアイズは見送って、暫くそのままであつたが彼女に視線が向けられているのに気づく。

早朝、日がまだ昇りきっていないこの時間、オラリオの住民たちは朝早い者以外寝静まっている。それならば答えは簡単だ。

「何の用だ、女」

「あの……えっと……」

アイズ自身弁が立つ方ではない。それどころか口数も少なくてたどたどしい。クーフリーンにバレたことでワタワタとするアイズで

あつたが、彼にとつてはいつでも良いのか気怠げに首の関節をポキポキと鳴らした。

「元氣？」

アイズの口から出てきた言葉は相手の体調を伺う言葉だった。朝の挨拶としては順当だがクーフリーン相手には意味がない。彼はまるで馬鹿を見るような目をアイズに向けた。アイズもそれには不満を持ったのか、自身の不満を表すように半眼を向けるもクーフリーンには何処吹く風。

「あの子……大丈夫、ですか？」

「あのガキの事ならてめえの気にする事じゃねえ。ましてや他のファミリアの事だ。首を突っ込むのはお門違いだ。違うか」

クーフリーンはそこで話を終わらせるべく、背を向けた。

「あの……！ また来ても、いいですか？」

「……好きにしろ」

そう言ったクーフリーンは今度こそアイズを置いて、廃教会の中へと姿を消した。

『抉<sup>ゲ</sup>り穿<sup>イ</sup>つ 塵<sup>ホ</sup>殺<sup>ル</sup>の槍<sup>グ</sup>!!』

過去、アイズたちロキ・ファミリアが37階層で足踏みを食らい、想定以上のモンスターの数によって少くない被害を被っていた時に、アイズが聞いたクーフリーンの初めての言葉がそれだった。

37階層に蔓延る全てのモンスターを殺し、挽肉にした槍の投擲。全員が突然の事態に呆氣に取られた。歴戦の猛者であるロキ・ファミリアの団長であるフィン・ディムナや副団長リヴェリア・リヨス・アールヴも、ファミリア結成当初の最古参であるガレス・ランドロツクでさえ絶句する中、ロキ・ファミリアの遠征組の視線を集めた存在は体から血の煙を立ちのぼらせながら彼らを放置して、次の階層に行こうとした。

アイズは声をかけた。

かけようとして、気を取られた。

壁から新たに生まれたモンスターがその豪腕を無防備な背中を晒すアイズに伸ばした。モンスターの巨体に比べれば小さな人の体など簡単に握り潰せる。危ないと――誰かが口にした瞬間、モンスターの肉体が爆ぜた。

『女、気を抜けば死ぬぞ』

そう言ったクーフーリンとアイズは目があった。

アイズはまるで自分を見ているようだと、胸を締め付けられた。

その赤い瞳は目の前の何も映しておらず、ただ己の中で燃え上がる復讐の炎に身を費やす悲しい存在。炎に自身が焼き尽くされようがそれで目的が果たせるなら構わないと、アイズにはそう感じ取れた。

その日、アイズはクーフーリンという名前を知った。

クーフーリンという悲しき復讐者の存在をアイズが心に記した日であった。

IF：殺戮の凶王が剣姫と共に戦うのは間違っているだろうか？

これは彼の前に現れた道によって紡がれる、もしかしたらありえる可能性の話。

不規則な塔が何本もそびえ立つ歪な形の館の前に何十人も多種多様な種族が集まりガヤガヤと話し合っている集団から、数メドル離れた場所に腰掛けて俯いている男がいた。黒衣を身に纏いその屈強な体を露わにする男の醸し出す殺伐とした空気に恐れをなしたのか、多くの種族が男から離れてヒソヒソと話しているが館から出て来た数人を前にしてその視線は男から離れていく。

館から出て来たのは数人。先頭に立つのは小さく小柄な金髪の小人族。小人族は数ある種族の中でも非力という事で侮られがちだがここに集まった者たちは誰も彼——『勇者』<sup>フレイバー</sup>フィン・デイルムナのことを侮ったりはしない。

フィンは笑みを浮かべ、館の周辺に集まった入団希望者の顔を見渡す。迷宮都市オラリオでも名高い冒険者であり、一ファミリアの団長である彼を前にすれば私語を口にするものは誰一人としていなかった。何十人と集まった入団希望者にフィンは苦笑いを浮かべるも、己が所属するファミリアが有名になってきている事に満足感を覚える。それが彼の野望とも言える夢を叶える事につながりつつあるからだ。

「おーおー。ぎょうさん集まったなあ。これみくんなウチの入団希望者かいな」

「どうやらそのようだ。今期はいつも以上に多い」

「よっしや！ それなら美少女や美女はぜんい——」

「ロキ、ふざけたことを言うなら時間をかけて話し合う必要があるな」

「ちよっ!? 冗談やからリヴェリア！ 堪忍してや！」

あまりにも美しい緑の髪のエルフの女性が糸目の女をたしなめる。

その糸目の女はオーバリアクションで話し合いを拒否し、値踏みするように入団希望者たちへと視線を向けた。

緑の髪の美しいエルフ『九魔姫』<sup>ナイン・ヘル</sup>リヴェリア・リヨス・アールヴはため息をついて己が所属するファミリアの主神―糸目の女―ロキへと視線を向けた。

天界きつてのトリックスター、ロキを主神とする彼らは現在、オラリオにおいてフレイヤ・ファミリアと合わせて二大巨頭と称されるほど力を秘めている。その強大な力を誇るロキ・ファミリアだが集まった入団希望者を全員囲い込めるほどの財力も、ましてやそのような暴挙を行う気もない。

「しかしロキの言う通り本当によく集まったもんじゃわい！ このヒヨッコどもを一体どうやって鍛え上げようかのう！」

「はん！ どいつもこいつも雑魚じゃねえか。使いもんになる奴なんざいねえだろ」

「ハツハツハ！ 相変わらず手厳しいなベート！ そうじゃな……ドワーフの火酒の飲み比べをワシとして勝つたら入団というのはどうだ！」

「そりやアンタが得するだけだろ……チツ……それにしてもウジャウジャと、数だけは居やがる」

第一級冒険者である幹部たちが入団希望者を見定め、見込みがあると判断されたものだけが入団を許可される狭き門。今期もその狭き門に挑戦しようとする者たちが集まったが幹部陣もこの数は予測していなかったのか辟易している様子。

豪快に笑うのはドワーフの男『重傑』<sup>エルガレム</sup>ガレス・ランドロック。そして彼の後ろで不機嫌そうに入団希望者を睨みつける鋭い目つきの獣人の狼人の名前は『凶狼』<sup>ヴァナルガンド</sup>ベート・ローガ。戦闘衣だけを着た彼らだがその実力はたった一人で数十人の入団希望者を蹴散らせる力を秘めた超人である。

「すごい！ これ全員入団希望者？ アマゾネスの子もいたりするかなテイオネ！」

「まあこれだけいるんなら一人や二人居るんじゃないかしら？ 私は

団長に近づくと女がいなきやそれでいいんだけどね」

褐色肌のアマゾネスの双子。妹の『大切断』<sup>アマゾン</sup>ティオナ・ヒリュテは入団希望者を前にしてその数にはしやぎ、姉である『怒蛇』<sup>ヨルムンガンド</sup>ティオネ・ヒリュテは冷静に入団希望者を観察する。対照的な二人であるが彼女たちは紛れもなく双子の姉妹であり、そして細く柔らかな体にモンスターをくびり殺せる脅力を秘めた第一級冒険者。

「さて……どうやって選別しようか。ここまで多いと顔を確認するのも一苦労だ」

フィンはそのように頭を掻きもう一度入団希望者たちの顔を見渡し、そして自分たちのファミリアの仲間である少女がじつと一点を見つめて動かない事に気づいた。振り返りその事を確認したフィンはその少女に話しかける。

何か気になる人物がいるのかと。

「アイズ。何か気になる人物がいたのかい？」

「……うん」

フィンの問いかけに、美しくも人形のように無表情の少女が頷いた。少女『劍姫』<sup>けんき</sup>アイズ・ヴァレンシュタインが誰かに興味を示すなど珍しく、幹部陣の誰もがアイズの視線の先にいる人物へと向き直った。

その視線の先には、黒衣を纏った人物が一人。

集団に交じることはなく殺伐とした空気を隠すこともなく。

「アイズさんが興味持つなんて！　もしかしてあーゆう奴が好みなんか!?!」

「な!?!　まじかアイズ！」

ロキとベートが食ってかかるもアイズは反応することはなく、ただ惹きつけられるようにその人物の方に向かってゆく。何十人という入団希望者がアイズの神秘的な容姿と『劍姫』の実力と名声に緊張して、もしかしたら自分に声がかけられるかもと期待するもアイズはその期待を難なく裏切ってその横を過ぎ去り、集団から外れた場所に座っている男に声をかけた。

「えつと……こんにちは」



まずコミュニケーションの基本は挨拶と、挨拶を口にしたアイズ。しかしその男は何も反応せず、黙って俯くだけであった。ムツとしたアイズだが意地になり、男が反応するのを待つ。男を前にしゃがみ込みじつと見つめる時間がしばらく過ぎた。

その構図は傍目から見れば、ロキ・ファミリアの幹部であるアイズに気に入られたというものに見える。入団希望の試験前であるというのに、それに不満を持つ者が出て来てもおかしくなく、そしてアイズに良いところを見せて入団しやすくなるようにという打算を考える者も出てもおかしくない。

「おいお前！ ロキ・ファミリアの幹部であるアイズさんが話しかけてくださるつてのに無視たあい度胸じゃねえか！ ああ!？」

大柄な体のヒューマンが拳を鳴らしてアイズと黒衣の男に近づいてくる。厳しい顔つきで近づく男を見て、別に私は偉くないしと疑問符を浮かべたアイズであったが男の行動は止まらない。

「アイズさん、俺がこいつを今シメてやりますから！」

「いや、あの——」

「おら、立ちやがれこの野郎！」

そう言つて大男がアイズの意見を無視して、自分の行動が正しいと思ひ込んで黒衣の男を立ちあがらせようと手を伸ばす。

「うるせえぞデクが」

この場にいる全員が冷酷無比で寒気がするような言葉を耳にした時、大男が腹を抑えてうずくまる姿を見る事になった。そして次の瞬間数メートル宙を舞つた大男だが、重力に従つて地面に叩きつけられる。衝撃によつて体内の空気を全て吐き出してしまいゴホゴホと咳き込み痛みをこらえるように体を丸め込んだ。

多くの者が呆気にとられていた中、ロキ・ファミリアの幹部陣は鋭い視線を黒衣の男に向ける。あの状況で大男を殴りつけたのは黒衣の男であることは明白だからだ。そして驚くべきことに、第一級冒険者であるはずの彼らであつてもその動きは正確に捉える事が出来な

かったのだ。

黒衣の男は立ち上がり、そばにいるアイズを無視して己に拳を振り上げた大男に追撃を入れた。うずくまる大男を踏みつけ、さらなる痛みを与えるべく体重と力をかけていく。ミシミシと耳障りな音が不特定多数に聞こえた。

「イデデデデッ!? 降参だ! もうやめてくれ!」

「ああ? 俺に手えあげたのはためえからだろうが。だったら……殺されようが何されようが文句はねえ筈だ」

ミシリと大きく音が鳴り、さらに力を入れて踏みつけようとした黒衣の男を、フィン、リヴェリア、ガレスの三人が止めた。黒衣の男の筋肉質な腕をガレスが掴み、その首元に杖と槍を突きつけたリヴェリアとフィン。

「もういいだろう。彼は戦闘の意思を失っている。もう君を害することはない。君も、無益なことをして面倒に絡まれるのは嫌だろう?」  
「減らず口の上手い小僧だな」

そう言つて黒衣の男は大男から足を退けて、最後とばかりにもう一度蹴りを入れた。石畳の地面を吹き飛ぶ大男。その男の仲間の数人が駆け寄つて介抱に努めるも男は咳き込むばかりで痛みには堪えていない。

「君、既に充分と言えるほど腕が立つようだね。一体何を望んでこのロキ・ファミアリアに來たのかな? ぜひ僕たちに教えてくれるかい?」

フィンは両手を広げて、まるで新たな仲間を歓迎するように言葉を発した。だが彼の瞳は油断なく黒衣の男を観察する。有用であれど、制御できなければいけない。そう言つた計算高さが伺える将としての瞳。

「俺の名前はクーフリーン」

黒衣の男はそれがわかつているのか、犬歯をむき出しにし凄惨な笑みを浮かべて告げる。ここが彼の分岐点である。殺戮の凶王が竈の女神の側で安らぐのではなく、笑う道化の神の下で劍姫と背中を合わせ戦う復讐譚。

「クソツタレな神を殺すためにここに来た」

IF：殺戮の凶王が剣姫と共に戦うのは間違っているだろうか？ その2

響く人間の声。それは己の勝利を信じ己を鼓舞する祈りである。吠え立てる怪物の声。それは目の前の侵入者たちを血祭りに上げんとする本能の叫びである。

世界に空いた深淵の穴、ダンジョン。人々は欲望を胸にそのダンジョンに赴き、己の抱いた野望を叶えるためにダンジョンで戦い、ある者は道半ばで朽ち果て、ある者は凱旋と共に地上へと帰還する。そのダンジョンの奥深く、誰の手も届かない天然の空洞が広がる荒野にて人間とモンスターの怒号が入り混じっていた。ダンジョンの49階層、大荒野<sup>モイトラ</sup>と呼ばれる一際広い空間で人間とモンスターのに陣営が雌雄を決するべく矛を交えていた。

人間は剣と鎧という装備を片手に知恵と勇気を振り絞り、片やモンスターは最強の武器たる己の強靱な肉体を本能のままに振るう。モンスターの名前はフォモール。

3メドルを越す巨軀に全身を覆う筋肉の鎧。全身を毛で覆われ、その硬い針金のような毛の鎧も生半可な武器を通さない。頭蓋から伸びる二本のねじ曲がった角が人間種とはかけ離れた存在であることを雄弁に語っている。そしてその目は真っ赤に染まり、殺戮しか頭がない本能で動く獣である何よりの証拠。

数えればキリがない何十匹というフォモールが陣形を保つ人間たちを轢き潰さんと咆哮を上げ、強靱な巨軀を活かして突進する。その突撃はただの人間など容易く挽き肉にしてしまう破壊力を秘めた一撃。

だがこの場にいる人間たちはただの人間ではない。神の恩恵を授かった超人、ダンジョンを攻略せんとその胸に各々の野望と夢を秘めた冒険者であるのだから。

「至急左翼支援！ ティオナ、ティオネ、急げッ！」

「了解です団長！」

「ほいほい！ とは言っても倒しても倒してもキリがないよ〜！」

「うっさいッ、ティオナ！ つべこべ言わずに……さっさと、倒すー！」

陣形の最前線に立ち両手の槍を振るうのは小さき体に勇気を秘めた小人族。彼の声は鋭く、その声はモンスターの怒号の中でも良く通り陣形の左翼が崩壊の危機にあると即座に察するや否や、その崩壊を防ぐべく最小で最大の効率を発揮できる人員に指示を出した。

その指示を受け取ったアマゾネスの双子姉妹。ティオナ・ヒリユテとティオネ・ヒリユテ。レベル5という冒険者の中でもトップクラスの身体能力を誇る二人は指示を正確に聞き取り、岩肌のむき出しの荒野の地面を踏みしめ一陣の風となって駆け出した。

ティオナは大剣を二つ、柄尻で合わせた武器を扱い、それを重さを感じさせない軽々とした動きで振るってフォモールの体をバツタバツタと両断していく。その豪快な戦闘技法は彼女の性格とアマゾネスの豪快さが合わさった彼女だけのスタイル。

対してティオネは両手に持ったククリナイフでフォモールの急所を的確に斬り裂き、貫き、その生命を終わらせる。力を兼ね備えタフなモンスターを相手にするにはこう言った小技の方が人間らしいと言えるのだが彼女がアマゾネスということを鑑みると疑問が浮かんでくる。しかし、今、この状況では彼女は非常に頼りになる存在であった。

二人の支援によって左翼は持ち直した。だがそれではじきに飲み込まれるだけ。フォモールの群れはその総数を保っている。

「間もなく、焔は放たれる」

しかし、人間たちには確かな希望がある。何十体というフォモールの群れを一撃で殲滅することができる魔法を放てる人物を知っている。

緑髪の絶世の美貌を持つハイエルフ、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

後衛の中、何人もの仲間の冒険者に守られた彼女は杖を手に持ち、目をつぶって己の中の魔力を言葉に添わせて形取ろうと呪文を紡ぐ。

「忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む」

呪文が紡がれリヴェリアの周りに活性化し、可視化した高密度の魔力の本流が立ち上った。その魔力の本流は間欠泉のように天に向かって上昇し、さらにその勢いを増していく。

次第に形を成していく破滅の戦火に仲間たちはここが踏ん張りどころだと歯を食いしばり、盾や武器を構えリヴェリアが呪文詠唱に集中できるようにその体を張った。その甲斐あってモンスターの大進行を食い止め、そしてさらにリヴェリアの魔力は活性化していく。

だがモンスターもタダでは終わらない。

巨躯のフォモールの中でも一際大きな巨体のフォモールが、その巨体を活かしたチャージングで前衛の一角を打ち崩し、その亀裂を見逃さないとばかりにフォモールが殺到した。

「ベートー！ 穴を埋めろ！ 急げ！」

ここに集った冒険者の中でも俊足を誇る狼人のベートー・ローガが悪態をつきながら、しかし焦った表情で陣形が崩れた場所に急行する。だが彼がいたのは反対側の右翼。俊足を誇るベートであってもその距離を踏破するには数秒かかる。

吹き飛ばされた前衛数人が急いで陣形を立て直すも巨大なフォモールはその穴を抜け、近場にいた魔法師のエルフに向かってその豪腕を振り上げた。

間に合わない、誰もがそう思った。

しかし、エルフを襲いかけたフォモールの巨体に閃光が走る。迸った煌めきを冒険者たちが視認した次の瞬間、フォモールの体は消失する。迸った煌めきは剣筋の煌めき。そしてそれを成せる超級の剣技を誇る冒険者はオラリオの中でも彼女一人だけ。

助けられたエルフ——レフィーヤ・ウイリデイスは歓喜の声で彼女の名前を呼んだ。

「アイズさん!!」

「大丈夫、レフィーヤ？」

「え、は——」

「レフィーヤ！ 遊んでる場合じゃないぞ！」

小人族の首領、フィン・ディムナの鋭い叱責にレフィーヤはすぐさま魔法の詠唱を開始し戦線復帰するも、その側に彼女を救ったアイズの姿はない。彼女は何処へと行ったのか。

「フィン！ アイズが一人でフォモールの群れの中に飛び込んじやった！ どうする!?!」

「まったく……手の掛かる子だよ！」

「フィン！ 俺が行く！」

「ベート……いや、クーフリーン！」

フォモールを切り刻み、独断専行を続けるアイズに頭が痛い顔を顰めかけたフィンであったが、そんな彼女の支援に行くと立候補したのはベート。確かにベートの実力は比類無きものでありアイズと二人であればフォモールの群れを凌げるだろう。だがそれでは足りない、フィンはその名を呼んだ。

その名前は敵味方問わずに畏怖を抱かせるもの。

味方はその名前に目を見開き、フォモールは知能がないにも関わらず、その名前が誰を指し示すのか分かったようにその視線を一斉に右翼へと向けた。

たった一人で右翼の戦線を維持する黒衣を纏った刺々しい凶悪な鎧を着込む屈強な男。凶悪な赤黒い槍を一度振るえばフォモールの体に風穴が開く。分厚い筋肉で覆われたフォモールを紙のように容易く引き千切り肉の塊に変える戦士。

「オーダーは」

クーフリーンはフィンに問うた。敵も味方も腹の底から底冷えするような冷淡な声を耳にした。

「リヴェリアの魔法がもうすぐ完成する。それまでにアイズを連れ戻せ！」

「了解」

クーフリーンは短く頷くと、悠然と歩き出す。たったそれだけの動きで右翼に攻め込んでいたフォモールが後ずさりを始める。フォモールも本能的に分かっているのだ。この戦士に、自分たちでは絶対

に敵わない事に。

「ベート、ティオナ、ティオネはクーフリーンの穴を埋めるために右翼配備！ 全員ここが踏ん張りどころだ！」

「はい、団長！」

「りよ〜かい！ さあ頑張るよ〜！」

「チツ……クソがアツ！」

三者三様。一人は従順に、一人は快活に、一人は怒り、右翼へと向かいクーフリーンの抜けた穴を埋めるべく、群がるフォモールたちを各々の方法で殺していく。真つ二つに、喉を貫き、蹴り殺し、瞬きの間に何体ものモンスターを築き上げるがまだまだ数は残っている。

フィンの指示によって奮起する冒険者たち。少し離れた場所でもフォモール相手に孤軍奮闘していたアイズだが、近づいてくる圧倒的な気配に視線を後ろへと向けた。その気配は遠く離れていても殺伐としていて、その気配に当てられたフォモールが尻込みしてしまうほど強烈だ。

目の前に迫っていたフォモールの脇を抜けて、すれ違いざまにその喉を刺突で絶命させ、返す刃で己に手を伸ばしていた別のフォモールの急所である魔石が埋め込まれているであろう場所を刺し貫いたアイズ。

「【ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを】」

「戻るぞ。あの女の魔法が完成する」

「……分かった」

『オオオオオ!!』

しかし、フォモールは逃さないとばかりに殺到して二人に手を伸ばしてきた。すでに自分たちが絶体絶命であることを悟ったのか、ならばお前たちも道連れだと、その血走った赤い目を光らせて手を伸ばす。

「邪魔だ」

眩き、槍を一閃するクーフリーン。それだけで数体のフォモールが魔石を一斉に砕かれ絶命した。圧倒的な武技、膂力を間近で見事に



なったアイズが思わず息を呑んで立ち尽くすもクーフリーンにとっては知ったことではない。

彼に下されたオーダーはアイズを連れ戻す事。

無防備なアイズの体を、ぶっきらぼうに、だが彼女の体が傷つかなないように抱きとめたクーフリーンは地を蹴り、陣形へと帰還する。数十メートルの距離をたった一回の跳躍で踏破したクーフリーンの力量は彼ら、ロキ・ファミリアにとって絶大な信頼を寄せるに相応しいものであった。

「焼き尽くせ、スルトの剣——我が名はアールヴ——」

彼女は告げる。振り下ろす烈火の剣の名を。

「レア・ラーヴァテイン」!!」

焔が数十体のフォモールを飲み込んだ。絶叫の不協和音。夥しいほどの死と叫びが焔の中から叫ばれる。焼却の焔がフォモールたちを飲み込み、そしてその生命に終わりを告げた。

リヴェリアは静かに息を吐き、己が成した結果を見つめる。荒野に香る焼けた肉の匂いを感じたロキ・ファミリアの遠征組は戦闘が終わった事で鬨の声をあげ、側にいる仲間が死んでいない事を喜んだ。

「さあみんな、次の階層に行こう。僕たちを未踏達階層が待っているよ」

50階層、モンスターが生まれることがないダンジョンのエアスポットでロキ・ファミリア遠征組は腰をおろし、拠点を作って先ほどの激戦での休息を取っていた。多くの者が総出となって動いている中、集団から外れた場所でクーフリーンは独り武器の手入れをしていた。

何本もの凶悪な棘が生えている赤黒い槍。己の槍の手入れを行うクーフリーンの下に近づく人影。彼はそれに気づいていたが反応することはない。彼にとって重要なのは戦いであり、その果てにある己の強化。他人の事など知った事ではないし、他人がどんな事情を抱えていても彼は首を突っ込む事はない。

「クーフリーン……」

「なんだ」

ただ、彼にも例外はいた。

アイズ・ヴァレンシユタインに限り彼は関与する。

「用が無いならためえの武器の確認でもしてろ。不壊属性デユランダの武器とは言え手入れを怠れば切れ味は落ちる。戦士の端くれなら自分の武器の手入れくらい出来るようになれ」

「……私には無理。だからやって」

「……見せろ」

最初からその言葉を待っていたのか、アイズは愛用の武器であるデスペレートデスプレートをクーフリーンに手渡した。クーフリーンはそれを受け取るとしげしげと眺め、表や裏と返して刀身を確認する。その間アイズはクーフリーンの隣に腰かけて武器を確認するクーフリーンの横顔をじつと眺めていた。

「【風】を纏わせ過ぎだ。刀身に負荷が掛かってやがる。これ以上無駄に負荷をかけるならなまくら以下の三流武器の斬れ味になる。地上に戻ったら武器の手入れに出しておけ」

「……そんなに?」

「いくらためえの【風】が武器と相性が良からうが少なからず負荷が掛かる。その上ためえは武器の手入れをしねえし暇がありやダンジョンデユランダに潜る。不壊属性デユランダでなけりや三日も保たずに折れて終わりだ」

「そんなに言わなくても……」

むくれたアイズだがクーフリーンが何事かを呟き、デスペレートの刀身に指を這わせるのを見た。指が這っていくごとに刀身を淡い光が包み込み、その光が浸透していく。そこには銀色に鋭く光るデスペレートの刀身があった。

「ルーン魔法をかけた。これでこの遠征の間は保つ。だが酷使すれば元通りだ。戻ったら武器の手入れに出しておけ」

そう言ってクーフリーンは別の場所に行こうと立ち上がった。

「あ、ありがとう……クーフリーン」

「礼を言うくらいならためえでやれ、アイズ」

I F：殺戮の凶王が影の国の女王に鍛えられるのは間違っているだろうか

「何やら珍妙な世界に放り出されたと思ったが……まさかお主に会うとはな」

「あ？ 何言ってるんだアンタ。初対面のくせに馴れ馴れしくすんな」

「……？ ふむ、ワシを忘れるとは偉くなつたなセタンタ。どれ、槍を出してみる。あの頃と同じ様に鍛錬をしてやろう。何、そうすれば思い出す」

「はあ？ 何言ってる——」

己の前世の記憶の殆どを忘れたが神への恨みと復讐心を胸に彼がクーフーリンとして転生したしばらく経った頃、その日の仕事を終えて村の外れで身の丈を超えた木の棒を槍代わりに我流の鍛錬を行っていた所に一人の女性が話しかけてきた。

クーフーリンにとってその女性には全くの見覚えがない。彼の人生において、目の前に立つ女性の美しさは想像を絶する域にあり美の神であっても裸足で逃げ出すほどの美しさだと彼は思ってしまった。

しかし神への復讐に燃えるクーフーリン。あつけに取られたのはほんの少しばかり、子供ながら並々ならぬ才気を感じさせるがその女性はその当然の様に受け流した。若干、自身の容姿に対するの反応に気を良くしていた様に見えるがそれはそれ。

女性は、手の中に、朱い槍を出現させた。

絶世の美しさを持つ見慣れぬ女性と朱い槍。

その組み合わせを見てしまったクーフーリンの体に、これまで感じたこともない様な警鐘が走り、無意識のうちに彼に戦闘態勢を取らせ

た。  
「ほほう。ワシの事を覚えていないまでも体に刻み込まれた経験と恐怖は覚えているか。しかし……お主些か腑抜けたか？ 構えが杜撰だ。それに恐怖が顔に出ているぞ」

「……アンタ、何者だ？ 俺は……アンタに見覚えはねえ!!」

「この私に啖呵を切るとは……大きく出たなクーフリーン！」

その後、村外れでクーフリーンの絶叫と悲鳴が何度となく口から発せられた。

クーフリーンと相対する女性の名前はスカサハ。影の国の女王にして、この世界とは別の、神域に至った超越者である。

「ではお主は私の知るクーフリーンではないと？」

「……だから、そう言ってるだろ。最初っからアンタに見覚えはねえって……てかガキにマジになるとかアンタマジで鬼だろ」

「ふうむ。てつきりワシの事を忘れておるものばかりと思っておったのだが……最初から覚えておらんと言うのならその反応は納得だな」  
草の生えた地面に大の字になって息絶え絶えのクーフリーン。幼くも村では大人顔負けの体力を持つクーフリーンが精魂尽きたと言わんばかりにどんよりとした顔で、腰に両手を当てて見下ろしてくるスカサハへと視線を向けた。

スカサハは形の良い顎に手を当て考え込む。彼女にとってもどうやら予期せぬ事態の様で困惑しているのが分かる。だが突然槍を持ってヒヤッハーと襲いかかってきた不審者に同情も憐憫も覚える事は無かった。

荒々しかった息をようやく整えたクーフリーンは何とか立ち上がり、改めてスカサハに向かい合った。

「アンタ、強えな。それにさつきも全然だった。違うか？」

「ちんまりとした体の割によくもまあ気付いたな。お主の見なした通り、先ほど私は全力とは程遠い。それどころかこの身は分霊……つまり本体の型落ちだ」

「マジかよ……それで型落ちとか……意味わかんねえ」

「何、お主も鍛えれば今のワシくらいにはなる」

今よりもっと強くなれる、その言葉にクーフリーンの顔に凄惨な笑顔が浮かんだ。今より強くなれると、自身よりも遥かに強い存在から

のお墨付きを貰ったのだから。

彼にとつて目指すべきは己の生と死を弄んだクソツタレな神に復讐する事。今より強くなれるというのなら、少なくとも今よりもクソツタレな神を殺せる確率が高いという事だ。

その笑みを見る事になったスカサハは考える。このままこの人物を放っておいて良いのかと。

彼女が手ずから鍛えた愛弟子のクーフリーンでは無い様だが、何の因果かその愛弟子の体を持ち、その体にはかつての経験が宿っている。スカサハが放っておいてもじきに大器となるだろう。彼女は確信を持って言えるが、その先にこの男は煉獄に落ち、その魂を墮落させる事も容易く予想できた。

スカサハにとつて、別にこの男が勝手に死のうが生きようがどうでも良かった。だが愛弟子の体を持つというのなら話は別だ。

「なあ、アンタ。俺を鍛えてくれねえか」

「……それが私に一体何の得がある」

「……飯とか住む場所をできる限り用意——」

「お主如きが何を献上できるといふのだ。腹が空けば己で狩りに出れば良い。住む場所なら作れば良い。ワシにとつて衣食住の調達など瑣末なものだ。その上で再び問う。お主は、一体何をこの私に献上する？」

確かにスカサハにはこの事態は予想外だ。だが、それだけだ。スカサハにとつてこの程度のこと片手間で対処出来る。

「頼むツ！俺を、強くしてくれツ！」

「……」

「俺は……どうしても殺さなきゃならねえ奴がいる！その為には、今以上に強くならなきゃならねえ!!」

クーフリーンは己の全てをかけて神を殺したかった。その為にはどんな屈辱でも耐える決意であった。体を動かし、頭を下げたクーフリーン。彼はこの世界に生まれ落ちて、初めて他人に頭を下げて頼み込んだ。

黙ってそれを見つめるスカサハは、目の前の男は自分が折れぬ限り

そのまままで居続けると簡単に予測できた。幼い体でありながら、その身に大した物を宿していると呆れたスカサハはため息をつく。

降参の合図であった。

クーフーリン、8歳の時。

「ではセタンタ。ワシが槍を持って追い立てるからお主は逃げろ。それだけだ」

「アンタ、何だそのセタンタってのは。何かの合言葉か？」

「……お主は知らんでも良い、まあ、かつての名残だな」

「あっそ……って!? 突然槍で突いてくるんじゃないっ!」

「黙れ。もう始まっておるのだ。死に物狂いで逃げまどえ!」

「クソがく!!」

クーフーリン、12歳の時。

「お主も体ができた頃だ。武芸を教えてやろう」

「ああ……。それで俺は何の武器を振るえばいい」

「全てだ」

「はあ……?」

「剣に槍に斧に、双剣、弓や盾の扱いその他諸々、ワシの知り得る限りの全てを叩き込んでやろう。戦場において武器を一つしか使えんというのは格好が悪い。生存率がまるで違う」

「ふぎけんな! なんもん——」

「ワシはやれと言った。ならばやれ」

「……クソツタレ!! やってやらあ!!」

クーフーリン、16歳の時。

「スカサハ。今日は何をする」

「ふむ。今日はルーン魔術の復習だな。ワシにルーンを打ち込んでこい」

「なら……【アンサズ】!」

「ほう! いい火力だ。これなら人間など容易く丸焦げにできる」

「それじゃ足りねえんだよ。俺は……この程度じゃあな!」

「ルーンの複数同時詠唱。随分と腕を上げたものだ。なら私も……  
【アンサズ】！」

クーフリーン、18歳の時。

「クーフリーン。お主にワシの槍を授けよう。銘はどうに知っておる  
な？」

「……礼は言わねえ」

「お主の様な捻くれ者の礼など要らん。ただ……この槍を授けるに  
あり、一つ条件がある」

「言え。アンタの事だからどうせロクでもねえ事だろうがな」

「察しの通りだ。それはな——いずれ必ず私の下まで辿り着き、この  
私を殺す事だ」